

〔和歌山編〕

風景も物語も、 色鮮やかに輝く熊野

中上紀 作家

東京で生まれ、長く海外でも過ごしたが、熊野は私の原点だ。父の故郷が新宮だったので、赤ん坊の頃からしばしば訪れ、小学三年の時、新宮にほど近い新鹿というまちに半年だけ住んだこともある。

熊野には「田舎」のすべてがある。最高級の海と山がある。東京で海といえば湘南・江ノ島だが、そのイメージとは桁違いの底知れない深みを持った海がある。山もさほど高くはないのに鬱蒼と深い。修験者たちが隠る山々。深い山に隠ることで、魂が癒され再生するような、まさに生命の循環を象徴するような場所だ。

ここ数年、常に熊野のことを考えている。少し前まではアジアにこだわっていて、デビュー作もアジアに関わる小説だった。でも結局、私はアジアの中に熊野を探そうとしていたのかもしれない。

アジアと熊野は黒潮でつながっている。はるか昔、秦の始皇帝の命で不老不死の薬を求め、東の蓬萊を目指して船出した徐福は、黒潮に乗り、新宮付近に漂着したとも言われている。今も南紀の海岸には、インドネシアやフィリピンの文字が書かれた漂着物が多いそうで、そのスケールの大きさが、いかにも熊野らしい。

一方、遣唐使として唐に渡った空海が、帰朝後開いたのが、紀北の高野山だ。高野山を訪れたのは冬。雪が舞う厳かな雰囲気に南紀とは異なる魅力を感じた。そこから護摩壇山を抜け、凍てついた山道を車で南紀へ向かう途中、ある一点で急にまわりの色が変わった。窓の外には南国の花が咲いている。青い寒色の世界から、一気に暖色・原色の世界へ。まるで時空をワープしたような不思議な感覚にとらわれたのを覚えている。

そんな熊野を舞台にすると、物語が色鮮やかに輝き出す。この地のさまざまな伝承を題材にした『熊野物語』の執筆中にも、それを感じた。男女の恋愛にまつわる伝説は古今東西あふれているが、熊野に伝わる話はどれも、発色が違う。すぐくリアルでありながら神秘的な色合いで、とても味わい深い。

私にとって熊野は、身体の一部。現在も、父が創設した民間講座「熊野大学」をはじめ、年に数回訪れている。そのいきいきとした色彩の風景は三十年前と少しも変わらないうし、願わくば変わってほしくない。そしてこれからも、いろんな顔を見せてほしい。はかり知れない深さをもつ熊野は、まだまだ未知の世界だから。 **【鑑】**



なかがみ のり 作家
1971年東京都生まれ。米国ハワイ大学芸術学部卒。アジア美術を学び、タイやミャンマーなど各地を旅する。著書は、最新作『熊野物語』、徐福伝説をモチーフにした『月花の旅人』のほか、『彼女のブレンカ』（すばる文学賞受賞）、『イラワジの赤い花』『悪霊』『アジア熱』『夢の船旅—父 中上健次と熊野』『海の宮』など。